

自宅跡は家族を弔う場

鎮魂の祈り

3.11から4年

太平洋が眼前に広がる大熊町熊川の高台に家族を弔う慰霊碑がある。自宅があったその場所には東日本大震災前まで両親や妻娘との幸せな日常があった。木村紀夫さん(49)は慰霊碑に手を合わせ、近くの海辺で捜索活動を再開した。震災から丸4年を迎える今も最愛の娘の面影を求めて―。

汐風。必ず見つけ出すがうな。一人で寂しくないように。いくら時間がかかっても続けろぞ。

東京電力福島第一原発から約3キロ離れた自宅は津波で流されだ。父王太郎さん(当時77)＝



木村さん(後列右)が大切にしている家族の写真。前列右から2人が行方不明の汐風ちゃん

大熊・娘が行方不明の木村さん

自宅跡に設けた慰霊碑に手を合わせる木村さん。行方不明の汐風ちゃんを捜し続ける(尾崎孝史さん提供)



は次女汐風ちゃん(当時7)＝人が自宅近くの水田で発見された遺体が深雪さんと判明、野真白馬村に避難し、母巴さん(76)は会津若松市で暮らす。白馬でペンションを営み、自然とからず、今では町唯一の行方不明者になった。

原発事故さえなければ、今でも許せない。後悔の念も強い。だぶん、ずっと気持ちは変わらない。

原発事故で捜索を中断、手作りのピンをまき手掛かりを捜した。震災の年の4月、王太郎さんと

生存は諦めているが、行方不明者が「ゼロ」ではない

生きる目的ができて落ち着いた。県外で被災者の心情や福島現状を発信していく。汐風、頑張るよ。

ない生活を目指す。

現在、長女舞雪さん(14)と長女

自宅跡は家族を弔う場。ここを中間貯蔵施設にはさせない。津波と原発事故の教訓として活用する。

毎月1度は町に入る。初めは一人だったが、支援者が集まり、がれきの山も捜せるようになった。すると、服やぬいぐるみなど、次々に見つかった。「きむらひ」などと書かれた体操着も出てきた。瞬間、震災で止まった心の時計が再び刻み始めた。

